

## 元禄期の字音仮名遣いの一例：中根元圭序『筌蹄集』のワ行仮名と唇内韻尾

岡島，昭浩  
九州大学文学部助手

<https://doi.org/10.15017/10426>

---

出版情報：文献探究. 20, pp.39-45, 1987-09-26. 文献探究の会  
バージョン：  
権利関係：



# 元禄期の字音仮名遣いの一例

—— 中根元圭序『筌蹄集』のワ行仮名と唇内韻尾 ——

岡島昭浩

汲古書院『江戸時代支那学入門書解題集成』第四集所収の『筌蹄集』は、上下二巻。上巻は読書綱領附用字之法・読書心法・虚字諺

解・倭點之例・點抹之例からなり、下巻は音註字例である。刊記は「元禄八玩進年孟春上幹日 書林梅邨彌白梓」で、「元禄乙亥三月下弦日中根元圭書」という序があり、そこに「余感賞編者之以筌蹄名 故贅其所以為器 以為之序」とあるが、編者の名は記されていない。中根元圭自身の著であると見なすよりはかになかったようである。宝永六年の書籍目録で「二梅村 筌蹄集 中根元圭」とあるし、『近代著述目録』でも元圭の著書として並べられている。しかし高橋博巳氏は、『筌蹄集』の巻上の辞書的部分は、荻生徂徠の『訳文筌蹄』と共通する部分が多く、「徂徠の口授写本が元圭の手でアレンジされたのが、すなわち『筌蹄集』巻上であり、巻下は元圭自身の手になるという憶測」を立てられた。

元圭は『異體字辨』の著者でもあり、杉本つとむ氏「異體字辨」の研究並びに索引<sup>(5)</sup>に、元圭の伝等も記されている（『杉本つとむ日本語講座1異体字とは何か』に「研究」部分所収）。和算家として著名であるが、『韻鏡明解』・『字彙直横図諺解』という韻学関係の著もある。『韻鏡明解』は現存不明だが元禄五年と十二年の書籍目録に載り、刊行された可能性が高いと杉本氏は記す。ただ、文雄『磨光韻鏡余論』<sup>(7)</sup>では「密存則有印融鈔一卷 中根元圭明解四卷

圓貞造闡鈔二巻」とあり、「密存」とあるからには文雄は写本で見得なかつたのであろう。<sup>(6)</sup>『字彙直横図諺解』も元禄五年の書籍目録に載るが、やはり現存不明である。

したがって中根元圭の韻字がどのようなものであったのかを、現時点では知ることは出来ない。しかし、今後これらの書が発見された際に、本稿に取り上げる『筌蹄集』巻下の音註字例の韻学的要素と比較することが出来れば、『筌蹄集』巻下の編者が元圭であるのかを考える一助ともなう。実はそれだけ『筌蹄集』巻下の音註字例は編者（或るいは校訂者）の韻学に対する造詣の深さを感じさせるものなのである。

一一

さて、音註字例は本文の前に次のような文を記す。

凡文字ノ註ニ如字トアルハ 上ニ云トコロノ本音ナリ カルガ  
ユヘニ其字ノムマレツキノマ、ニヨム 又或ハ平聲 或ハ上聲  
或ハ去聲 或ハ入聲トアルハ 皆轉音ナレバ 常ノ訓トタガフナ  
リ又某切 或音某トアルニハ 轉音モアリ ヨメガタキ字ニ註ス  
ルモアルナリ 同平上去入ナレドモ 韻又ハ字母ノカハリタルヲ  
註スルモアリ 本音轉音トモニ字書ニコレヲ考レバ明白ナリトイ  
ヘドモ毎字考索スルコト勞煩ナラザルニアラズ 故ニ今尋常用ル  
トコロノ字ヲアツメテ 畫数ヲ以次第シテ其字義分明ナラシム

中ニツイテ同韻ニテ同音ノ字ニハ各々三十六字母ヲ記シテワカツナリ 又同圍ノ中ニ二音アルハ 漢音ヲ先ニノ吳音ヲ後ニス 又韻バカリニテ和音ヲ記サルハ前圍ト同ジ

つまり、一字で二音以上有るものについて音と意味の關係を説明したもので、『免字便蒙解』等に先立つものである。しかし、二音の違いを示すのに、反切ではなく、韻と三十六字母を示すのはこの種の書としては珍しいようである。韻鏡に載らない字の三十六字母を記すには、韻書と韻鏡との対比を編者が行ったのはあるまいかと思われる。韻書自体に三十六字母を記したものとて、文雄も使用した『五音集韻』がまず想起されるが、この『筌蹄集』の分韻は『五音集韻』とは異なる様で、韻鏡と対比した可能性が高まるわけである。『古今韻會舉要』のように三十六字母で記してなくとも一定の順序で並んでいる韻書によつたとすれば、必ずしも韻鏡と対比したとはいえないが、韻学にながしかの理解を示す人物が編者であつたとは言ひ得るであらう。

編者が書名をあげて本文中に引用している韻書としては『五車韻瑞』孫愐ガ廣韻『二毛晃ガ禮部韻』洪武正韻があり、また『字彙』の音も使用している。

本文の例を示せば左の如くである。

乙 入質

キノト・ツバメ・カガム

入結

アツ 文選思 通ノ軌

軌ニツクル

右が一般的な形であるが、『韻バカリニテ和音ヲ記サルハ前圍ト同ジ』というのは左のようなものである。

下 上馬

シモ・シタ

去橋

クダル

同韻異声母の場合は次のように記す。

女 上語娘母

ムスメ

上語日母

ナンヂ

去御

ランナ

娘母ダナ行、日母ザナ行という対応も、編者の韻字への理解、字音仮名遣いの意識を感じさせる。

二一

字音仮名遣い史上、興味を引くものとして、アヤ行の仮名とワ行の仮名との使い分け（イとヱ、エとエ、ヲとオ）が見られることがあげられる。

まずエとエについて見る。本文中の形をあげて、韻鏡上の位置と広韻の半切を記す。開合については通行の韻鏡のものを記す。

工

衣平微

エ

平微九開三等影母

於希切

泄去霽

エ

去祭十五開 四等喻母

餘制切

闕入月

エツ

入月二十一開三等影母

於竭切

殷平先

エン

（平山二十一開二等影母

烏閑切）

烏平先

エン

（去諫二十三開二等影母

於諫切）（集韻）

焉平先

エン

平仙二十三開三等千母

有乾切

闕平先

エン

平先二十三開三等影母

於乾切

咽平先

エン

平先二十三開四等影母

烏前切

咽入屑

エツ

入屑二十三開四等影母

烏結切

天上篠

エウ

上小二十五開三等影母

於兆切

約去嘴

エウ

去笑二十六合四等影母

於笑切

要平蕭

エウ

平宵二十六合四等影母

於宵切

姚平蕭

エウ

平宵二十六合四等喻母

餘昭切

陶平蕭エウ 平宵二十六合四等喻母 餘昭切  
 易入陌エキ 入昔三十三開四等喻母 羊益切  
 射入陌喻母エキ 入昔三十三開四等喻母 羊益切  
 葉入葉喻母エフ 入葉四十合 四等喻母 與涉切

ア

畫去卦グワ 去卦十六合 二等匣母 胡卦切

越入月オツ 入月二十二合三等子母 王伐切

遠上阮エンオン 上阮二十二合三等子母 雲阮切

説入屑エツ 入薛二十二合四等喻母 弋雪切

員平先エン 平仙二十四合三等子母 王權切

緩平先エン 平仙二十四合三等子母 王權切

噉入屑エツ 入薛二十四合三等影母 乙劣切

開口韻にエが使われ、合口韻にエが使われている。影母・喻母でもエはあるが、それは合口韻の場合である。開合の対立に関しては『筌蹄集』の本文中にも、

衡平庚開口カウガウ

(中略)

平庚合口クワウ

という条が見え、文雄程度の理解はしていたと思われる。

韻鏡の二十六転は通行の韻鏡では合口になっているが、二十五転とは開合の対立の関係にあるのではなく、『磨光韻鏡』にも記すように、開口であって欲しいところである。元禄四年の『韻鏡易解』でも開口に改訂しているし、『筌蹄集』の編者がそのような韻図によったことも考えられる(或いは本人が改訂した可能性もある)。また四十転も開合の対立があるわけではなく、開口であってよい

ところである。『磨光韻鏡』では合口になっているが、『韻鏡易解』は開口にしている。二十六転・四十転が開口であれば、合口エ・開口エの例外は無くなる。

いと井でもエとエ同様、合口ワ行・開口ア行となっている。

イ

圍入屋イク 入屋一開合 三等子母 于六切

粥入屋イク 入屋一開合 三等喻母 余六切

蛇平支喻母イ 平支四開合 四等喻母 弋支切

易去眞イ 去眞四開合 四等喻母 以鼓切

施去眞イ 去眞四開合 四等喻母 以眞切(支韻式支の又切)

台平支イ 平之八開 四等喻母 與之切

食去眞喻母イ 去志八開 四等喻母 羊吏切

噫平微イ 平之九開 三等影母 於其切

惹去眞イ 去眞 開 影母 於記切(集韻)

乙入質ヲツ 入質十七開 三等影母 於筆切

殷平殷イン 平欣十九開 三等影母 於斤切

圉去宥イウ 去宥三十七開三等子母 于救切

中

委上紙巾 上紙五合 三等影母 於詭切

為平支巾 平支五合 三等子母 蓬支切

尉去未巾 去未十合 三等影母 於胃切

尉去未巾 去未十合 三等影母 於胃切

以上のようにここでも例外はないと言えよう。また字音仮名遣いの上でよく問題となる止摂合口にも巾が当てられている。

吹平支ス巾 平支五合 三等穿母 昌垂切

表平支ス巾 平脂七合 二等山母 所追切

臺上紙ル巾 上旨七合 三等来母 力軌切

出去眞スキ 去至七合 三等穿母 尺類切

率去眞ルキ 去眞 合 三等来母 力遂切(集韻)

術去眞スキ 去眞 合 徐辭切(集韻)

帥去眞スキ 去眞七合 二等山母 所類切

以上のようにすべてキがあてられ、ここには示さぬが、蟹摂にはすべてイが当てられているのは注目にあたしい。字音仮名遣で止摂合口がウキ表記に統一されるのは、文雄の『倭字大観抄』以降のこととなっているからである。ただ、本居宣長の『字音仮字用格』等はクキとする牙喉音が『筌蹄集』では、

龜平支キ 平脂七合 三等見母 居追切

となっている。スイ等をスキ等にすることは出来ても、クイではないキ(『韻鏡易解』や『磨光韻鏡』でもキである)をクキに変えることは困難だったのであろうか。

ヲとオについては本居宣長以前の状況として普通の、ア行のヲ・ワ行のオである。前出の「越オツ」「遠オン」「乙ヲツ」を見ると開口にヲが当てられ、合口にオが当てられているのがわかる。他の例を掲げると、

於平魚オ 平魚十一開 三等影母 央居切

於平虞オ 平模十二開合 一等影母 哀都切

烏平虞ウ 平模十二開合 一等影母 哀都切

悪平虞影母オ 平模十二開合 一等影母 哀都切

亞 オ 平模十二開合 一等影母 哀都切

十一転十二転は問題となるが、『韻鏡易解』ではともに合口に改訂されており(『磨光韻鏡』も同様)、そのような韻図によったとすれば、『筌蹄集』の編者の合口ワ行・開口ア行という字音仮名遣いは守られていることになる。

四

以上の他に、屋韻の三等韻はすべてイクで統一する(宿粥祝がシクとなる)など、字音仮名遣い的なものはあるが、ここで特に目を引くのは唇内韻尾と舌内韻尾の書き分けである。唇内韻尾にはすべてムが当てられ、舌内韻尾にはすべてンが当てられている。中世に失われた唇内韻尾と舌内韻尾との区別を再発見したのは、江戸時代も後期の太田全斎・義門であるといわれていた。しかし、後世に影響は与えてはいないものの、元禄時代に両韻尾を区別すべきことに気付いていた人物として中村惕斎があったことは本誌十八号で述べたところである。この『筌蹄集』は惕斎のものとは違って、字音について説明したのではなく、実際に両韻尾を表記し分けたものとして特異なものである。

以下に字音表の唇内韻尾の部を掲げる。実際の音型が示されていないのは、前項もしくは同行の同字の音型と同じ形である。また本文で前項にあたる文字が、この表では前項もしくは同行にない場合は、そこに示された音を括弧に括って示した。韻は本文のままで、四声の相配はほぼ適当なところに置いた。

唇内

沈平侵チム 沈上侵シム 沈去沁チム

湛平侵チム 湛去沁

參平侵シム

任平侵ジム 任去沁

妊平侵ジム

西早 妊去沁

沈平覃タム

内入合ナフ

湛平覃(タム)  
三平覃心母サム

三去勸

合入合見母カフ  
合入合匣母ガフ

三平覃清母  
參平覃サム

封去艶ヘム

儻平鹽

儻上琰ケム

占去艶

儻入葉ケフ

占平鹽セム

葉入葉審母セフ

湛平鹽セム

葉入葉喻母エフ

咸

湛上賺タム

湛去陷

葉入葉喻母エフ

入声にもすべてフが当てられているが、言うまでもなく喉内韻尾や流攝・効攝にはすべてウが当ててある。  
次に、舌内韻尾がすべてン表記で、ム表記の無いことを示すために字音表の舌内韻尾の部分掲げる。

古六

便叶音平真ヒン

屯平真チユン

敦上軫チユン

龜平真キン

身平真シン

信平真シン

葵平真照母シン

葵平真從母ジン

信去震

準上軫シユン

盡上軫從母ジン  
盡去震

比入質ヒツ  
宓入質ミツ  
啞入質チツ  
姪入質チツ  
尼入質チツ  
苗入質キツ  
結入質キツ  
質入質シツ  
率入質シツ

咽平真イン

盡上軫精母シン

認去震ニシン

文

分平文フン

貫平文フン

聞平文モン

斤平文キン

法平文ウン

員平文ウン

(殷平殷イン)

二元  
番平元敷母ハン

番平元奉母パン

貫平元ホン

繁平元ハン

屯平元トン

敦平元端母トン

敦平元定母

敦上阮

敦去願

術入質ジュツ  
出入質シユツ  
卒入質シユツ  
帥入質シユツ

疊入質リツ  
率入術リツ

乞入迄コツ

分去問ブン  
貫去問フン

聞去問

斤去問  
近去問

斤去問  
近去問

斤去問  
近去問

員去問  
殷去問

員去問  
殷去問

員去問  
殷去問

員去問  
殷去問

員去問  
殷去問

員去問  
殷去問

員去問  
殷去願

員去願  
敦去願

越入月オツ

核入月コツ

闕入月エツ

闕入月エツ

沅平元ゴン  
孫平元ソン

痕

遠上阮  
オン

孫去願  
遠去願

寒

胖平寒  
ハン

胖去翰

繁平寒  
(ハン)

敦平寒  
タン

單平寒  
タン

難平寒  
ナン

但上早  
タン

難去翰

但去翰

冠平寒  
クワン

乾平寒  
カン

諺去翰  
ガン

汗平寒  
カン

早上早  
カン

早去翰

剛

命去諫  
マン

間去諫

間平剛  
ケン

緩平剛  
クワン

孛入没  
ボツ

汨入没  
モツ

汨入没  
母

拔入曷  
ハツ

汰入曷  
タツ

阿入曷  
アツ

闕入曷  
アツ

害入曷  
カツ

越入曷  
クワツ

還平剛  
クワン

山

殷平山  
アン

還去諫

先

番平先  
ヘン

平平先  
ヘン

便平先  
ヘン

傳平先  
テン

佃平先  
テン

乾平先  
ケン

先平先  
セン

便去諫

傳去霰  
澄母

傳去霰  
知母

佃去霰

鮮去霰  
ケン

見去霰  
見母

諺去霰  
ケン

先去霰

拔入黠  
ハツ

頤入黠  
カツ

介入黠  
カツ

刷入黠  
サツ

茁入黠  
サツ

殺入黠  
セツ

率入黠  
サツ

蔡入黠  
サツ

乙入黠  
アツ

滑入黠  
クワツ

別入屑  
並母

別入屑  
幫母

啞入屑  
テツ

姪入屑  
テツ

綴入屑  
テツ

契入屑  
溪母

偈入屑  
見母

偈入屑  
溪母

結入屑  
ケツ

契入屑  
見母

韻入屑  
ケツ

寘入屑  
ゲツ

洗上銃セン

情去殺セン

單上銃

還平先セン

還去殺

鮮平先セン

焉平先喻母エン

關平先エン

烏平先エン

殷平先エン

浚平先エン

員平先エン

咽平先エン

咽去殺エン

見去殺匣母ゲン

儒上銃ナン

仙

身平仙ケン

以上のように、この『筌蹄集』は唇内韻尾と舌内韻尾とをムとンで表記し分けるのだが、著者はこの元禄という時期になぜその区別を知るに到ったのであろうか。独自に到達したということもあろうが、他の人の説によったとすると気になるのはやはり中村惕斎である。惕斎の『韻学私言』の序が元禄五年であった。この『筌蹄集』は元禄八年の序並びに刊行である。また杉本つとむ氏によると、元圭の漢学の師は惕斎か、と林鶴一氏が『和算研究集録』に記しているという（岡島未見）。ただ、九州大学蔵『惕斎文集』（書簡等も含む）にも元圭の名は見えないようであるし、惕斎の区別の仕方はム

殺入屑セツ

切入屑セツ

泄入屑セツ

刷入屑セツ

契入屑心母セツ

苗入屑セツ

橋入屑セツ

準入屑セツ

説入屑セツ

説入屑エツ

噉入屑エツ

契入屑匣母ケツ

咽入屑エツ

とヌであるのに対し、『筌蹄集』の方はムとンという違いもあり、はつきりとした繋がりは見出せない。『筌蹄集』の著者が何によって区別を知ったかという問題は今のところ放置せざるをえないが、『筌蹄集』に唇内韻尾と舌内韻尾との区別があることは認められるであろうことを報告するにとどめて、本稿を閉じたいと思う。

註

- (1) 昭和五十年十月発行
- (2) 新道文庫編「江戸時代書林目録集成」
- (3) 勉誠社「近世著述目録大成」による。
- (4) 「中根元圭と荻生徂徠」文芸研究一〇九号 昭和六十年五月
- (5) 文化書房博文社 昭和四十七年発行
- (6) 桜楓社 昭和五十三年発行
- (7) 上巻三丁才・勉誠社文庫による。その二十七頁。
- (8) 「密存」に対するのは「現行于世」だが、こちらの方の書は大部分刊本が残っていて、『国書総目録』では、「書籍目録による」項目はあっても、写本のみ項目はない。「密存」の方の「明解」を除く二書はいずれも写本のみで伝わるものである。
- (9) たとえば「五音集韻」は冬韻と鐘韻を分けているが、『筌蹄集』では鐘韻の字も冬韻と示されていて、『集韻』に近い。しかし『集韻』に見えぬ韻目もある。
- (10) 清田新造氏「スキ「ツキ」ユキ「ルキ」の字音仮名遣は正しからず」『中国音韻史論考』（昭和三十九年 武蔵野書院発行）所収（原載「国学院雑誌」大正八年三月）。「新明解国語辞典」（昭和四十七年 三省堂発行）あとがきも参照。
- (11) 清田新造氏「日本学者の韻鏡開合問題」『中国音韻史論考』所収（原載「国学院雑誌」大正七年十二月）参照。
- (12) 文雄や宣長のワ行仮名については清田新造氏「韻鏡第一第十二第十八転の「ヲウ」「ヲ」「ラン」の字音仮名遣は誤解に本く」（原載「国学院雑誌」大正十年十月）。「日本古書の鳥嶋悪平四字の「ヲ」音は正音に非ず」（原載「国学院雑誌」大正十年十二月）とともに「中国音韻史論考」所収。
- (13) 「元禄期における字音M尾N尾の発見」中村惕斎の「韻学私言」――清田新造氏「字音に於けるM尾N尾の発見に就て」『中国音韻史論考』所収（原載「国学院雑誌」大正十五年三月）参照。